中学生連載企画

私たちのふるさと松山学 No.19

椿中学校

わが身を犠牲にして村人たちを救った義民 今村久兵衛（きゅうべえ）

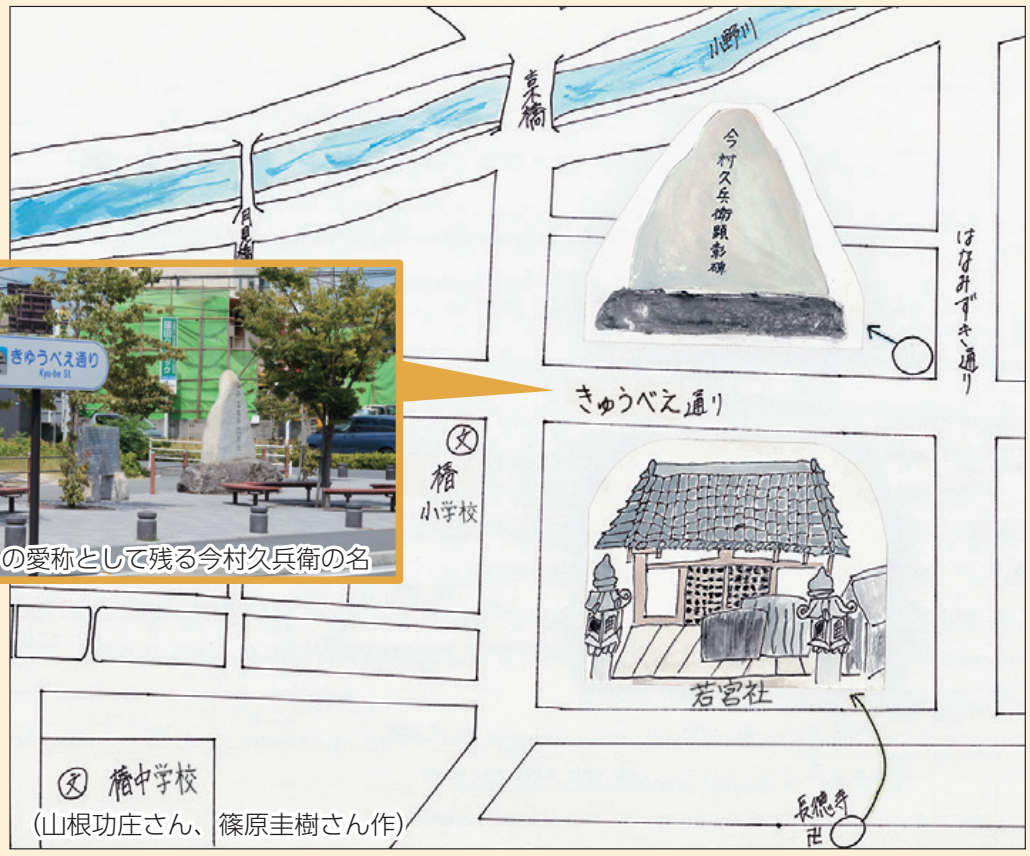
私たちは総合的な学習の時間に、今から約400年前に自らの命を投げ出し、村人たちを救った今村久兵衛の功績などについて調査しました。

寛永6年の大干ばつ

今から約400年前、現在の古川地域にあった片平村という村は高台にあり、乾燥した土地でしたが、当時の村人たちは重信川の氾濫を恐れ、この地に住んでいました。

1629年（寛永6年〈※年代は諸説あり〉）の夏、これまでにない大干ばつになり、田んぼの水は乾き、稲は育たず、農民たちは途方に暮れました。なぜなら、その年の年貢米が納められないからです。

この村の庄屋だった今村久兵衛は、そんな農民たちを見て、代官に年貢を減らしてもらうようにお願いしましたが、田の様子も見てもらえず、これまで通りの量の年貢を納めるように言われました。そのことを聞いた村の農民たちは頭を抱えました。



（山根功庄さん、篠原圭樹さん作）

通りの愛称として残る今村久兵衛の名

捕らえられた村人たち

農民たちが干ばつの被害に悩む中、今度はウンカ（稲の病害虫）がこの地域一帯に大発生しました。この被害を抑えるためには稲を焼き払うしかありません。しかし、代官は田の様子を見ることもなく、稲を焼くことも認めません。そして、年貢も納めるように命令したのです。村人たちの我慢も限界のところまできていました。

そんなある日に事件は起きました。強い西風が吹き荒れた日に、稲に火が放たれ、田畑があっという間に焼け野原となってしまったのです。

（池本和さん、越智梨帆さん作）
火が放たれ焼け野原となった田畑

このことを知った代官は年貢を逃れようとした村人の仕業と激怒し、多くの農民を捕らえ、何日も家に帰さず厳しい取り調べを続けました。

身代わりになり村を救った久兵衛

村では、夫を捕らえられた妻や子が苦しい生活を続けていました。

こうした様子を見た久兵衛は村の人たちを救うため意を決し代官所へ向かいました。そして「稲に火を放ったのは自分です。どうか村人たちを釈放してください」と名乗り出たのです。

こうして久兵衛は捕らえられ、首謀者として藩主から打ち首を命ぜられました。

久兵衛の処刑の日には多くの村人が刑場に集まり、自分たちの身代わりとして命を投げ出し、村を救った今村久兵衛の最期を目に焼き付け、決して忘れまいと誓いました。

長徳寺境内に建つ若宮社

今も続く地域の人たちの思い

久兵衛の死後、その行動に感謝、尊敬する村人たちによって長徳寺（古川南三丁目）の境内に久兵衛の遺徳を祭る若宮社が建てられ、百年祭が盛大に行われたと伝えられています。

そして現在、古川北地区を通る市道には「きゅうべえ通り」という愛称がつけられ、顕彰碑が建てられるなど、久兵衛の献身的な行動は、地域の人たちによって今も語り継がれています。

地域を大切にし、思いやりの心と行動する勇気を持ちたい

村と農民を救うために行動した久兵衛の思いに強く心を動かされました。久兵衛が守り抜いたこの地域を大切にし、歴史を語り継ぐとともに、人を思いやり、ときには勇気をもって行動することができる人間になりたいと思います。

前列左から、山根功庄さん、伊藤諒さん、篠原圭樹さん。後列左から、高橋杏実さん、越智梨帆さん、池本和さん（いずれも2年）

先人と文化の読み物教材「語り継ぎたいふるさと松山 百話 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

第Ⅰ巻に今村久兵衛を収録

松山の先人や文化に関する心に響くエピソードをまとめた教材集です。一話が10～14ページ程度で、気軽に松山ゆかりの先人の足跡や文化に親しむことができ、市立図書館で見ることができます。